

高木竜馬さん(ピアノ)応援レポート

「高木竜馬ピアノリサイタル～ウィーンからの風」

2017年9月1日(金)19:00開演

カワイ表参道コンサートサロン「パウゼ」

<演奏会概要>

◆プログラム

ハイdn:ソナタ 変イ長調 第31番 作品XVI-46

ショパン:12のエチュード 作品25

休憩

ブラームス:3つの間奏曲 作品117

シューマン:幻想曲 ハ長調 作品17

◆お客様の人気投票で決めるアンコール

ベートーベン:エリーゼのために

ドビュッシー:水の反映

ショパン:スケルツォ 第2番

ラフマニノフ:パガニーニの主題による狂詩曲より 第18変奏曲

プロコフィエフ:戦争ソナタ 第7番 第3楽章

ショパン:英雄ポロネーズ

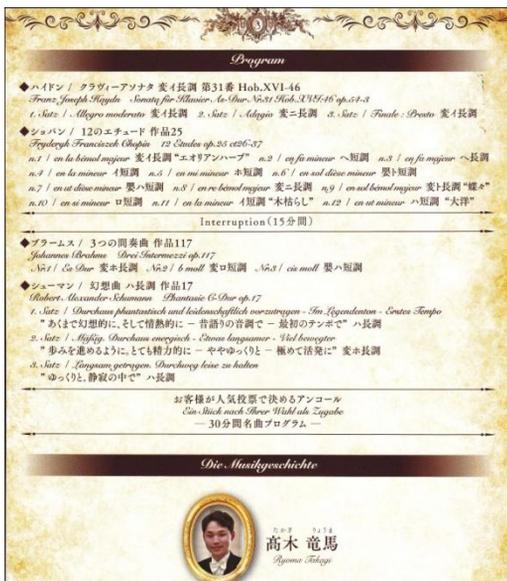


(当日のフライヤーより)

カワイ表参道のコンサートサロン「パウゼ」でのリサイタル。ここでのリサイタルでは、演奏者の息遣いや身体の動き、鍵盤の上を縦横無尽に動く指、ペダルの踏み方まで良く見えます。高木さん自身、あるレポートに「密なる小空間での演奏は、お客様との相互方向の対話の密度が濃い。お客様の心から放出されたエネルギーを享受していることを強く感じるのです。」と書かれています。高木さんのエネルギーに触発され、心を動かされた聴衆の高まったエネルギーも高木さんに伝わっていた気がします。

高木さんの演奏を聴いていると、何故か作曲者が作曲をしている姿が脳裏に浮かびました。もちろん想像でしかありませんが、作曲家が思いを込めて、何かを伝えたくて、何度も書き直しながら創った旋律を、数百年後に演奏家が演奏し、聴衆に伝える。演奏家がいなければ素晴らしい作品を後世の人々は聴くことができません。

高木さんはまた、「楽曲に向き合う際に、まず曲を書いた当時の作曲家の心理に可能な限り近づくことは不可欠です。」とも書かれています。そういう準備をし、演奏をされるからこそ、作曲者が作曲をしている姿が脳裏に浮かんだのだろう。



(当日のフライヤーより)

今の高木さんを作ったものは何なのか、いつも何を思いながら演奏活動をしているのか、これからどんな演奏家をめざしているのか。
高木さんの過去、現在、未来について直接お聞きしたところ、
とても奥深い、興味深い回答をいただきました。是非お読みください♪♪

Q1. どの時代の、どの作曲家が特に好きですか。その理由もお聞かせいただけますか。

A1. 作曲家には、それぞれの民族のもつ誇りが大きな原動力となり、筆を進める作曲家がいます。近年は特に、ショパンの愛国心に魅了されています。そのような視点から楽曲を分析していくと、楽曲から新しい側面が見えて参ります。

Q2. 聴衆を前に演奏される時、どういう演奏をしたいと思って臨まれますか。

A1. 演奏会にいらっしゃるお客様は、皆様それぞれが業をお持ちです。日々必死に働いていらっしゃる皆様が、憩いを求めていらっしゃるのが、演奏会の場だと感じております。私の演奏をお聴き下さり、少しでも皆様がご持ちの業に良い方向に作用することが出来たら、演奏家として、これほど名誉なことはございません。

そのために、笑わせて泣かせて、喜ばせて悲しませて、お客様の様々な感性に触れられるような演奏を目指しております。



Q3. 高木さんにとって、音楽とは、ピアノとはどんな存在ですか。

A3. イモラ国際音楽アカデミーで師事しております、ボリス・ペトルシャンスキー先生は、初めてのレッスンでこのようにおっしゃいました。「素晴らしい音楽家になりたいければ、まずは心を磨きなさい。貴方自身の心が、音楽を映す鏡となるのですから。」

音楽とピアノを通して、様々な土地へ行きました。多くの人々と出会いました。日々、過去に綴られた作曲家からのメッセージに、考えを巡らせています。音楽とピアノは、私を人間として成長させてくれる掛け値の無い存在です。



Q4. 練習をしたり、演奏をしたり、移動したり、大変なこともあると思いますが、そのような毎日を支えているモチベーションは何でしょうか。

A4. 練習や演奏を、苦に感じたことはありません。自分が愛する音楽に打ち込み、人生を歩んで行けますことに、深く感謝しています。

人間が最も大きな力を発揮することが出来るのは、自分のためではなく、世のため人のために働いた時だと考えております。日々のモチベーションを支えていますのは、演奏会にいらして下さるお客様や、応援をして下さっている方々です。

Q5. ベストな状態で演奏できるよう、日頃から気を付けていることはありますか。

A5. 私のマザー・ティーチャーでありますエレナ・アシュケナーズ先生は、優れた演奏者になるための秘訣を、幼少時に教えて下さいました。「音階の練習を欠かさず行きなさい。何故なら、音階は神様が創ったものだからです。」「ゆっくりと練習をして、音を深く聴きなさい。」この2つの教えは、常に守っております。

また、バッハの「前奏曲とフーガ」とショパンの「練習曲」は欠かすことなく弾いております。



Q6. 欧州、日本で演奏していらっしやると思いますが、欧州と日本では歴史も地理的要素も全く異なると思います。その両方で演奏していらして、音楽、環境、聴衆等において何か大きく異なるものを感じられることがありますか。

A6. 私が最も大切にしていることは、私が日本人であるということです。古事記を愛読しておりますが、読めば読むほど、美しい日本に生まれましたことを、大きな誇りに感じております。

愛憎無き立場から、各国の音楽の良い部分を取り入れ、日本人の魂を通して、演奏をすること。そのためには、各国に伝統として伝えられている真髄に触れることと、日本人としての魂を磨くこと、この両点に尽力しなくてはなりません。

Q7. 今後、どのような演奏家を目指していらっしやるのでしょうか。そのために今、何をしようと考えていらっしやいますか。

A7. グローバリズムの流れを汲んでいる現代ですが、私は、作曲家はそれぞれの民族の叫びを音に託して、筆を進めたと感じています。グローバリズムの発展の恩恵を受けて、海外に留学出来ていることは事実ではありますが、今一度それぞれの民族の違いに注視して、叫び声に耳を傾けて表現することを、目指しています。



愛する音楽、ピアノに打ち込める幸せに感謝しながら、自分の心を磨く。

聴衆の感性に触れるような演奏を目指す。そのためには日本人としてのアイデンティティを持ちながら、様々な国の歴史や文化、民族の違いを研究し、作曲者を理解する。

日々、そんな研鑽を積んでいる高木さんの演奏はこの後どのように変わっていくのだろう。

その変化を追いかけるのが楽しみだ。

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン (1732 オーストリアラウアー 1809 ウィーン)
クラヴィアソナタ 第31番 変イ長調 Hob.XVI-46

1766年にエステルハーゼ侯爵家の楽長グレゴール・ヴェルナーが没し、副楽長だったハイドンはその栄誉ある職に昇りつめます。アイゼンシュタットの侯爵宮とエステルハーゼ離宮、ウィーンのハプスブルグ王宮、ハンガリー宮殿の頭職を歴任し、当主のニコラス・エステルハーゼ侯爵からの敬愛と深い理解を得て、ハイドンの人生は満帆です。時を得たハイドンは、67年から68年にかけて、この深遠なる傑作ソナタを完成させます。勿論、充実期ハイドンの温かさが溢れる明朗さや、鋭敏で繊細な芸術的感覚から湧き起こる温かな情感が、音と音の間を満たしています。だのに、哀しいのです。春の木漏れ日のような笑顔で常に人へ接したハイドンの、複層し底見えぬ哀しみの理想が、私たちの心に迫るのです。このハイドンの深層は、70年代の「交響曲第44番(悲しみ)」「交響曲第45番(告别)」や、畏友モーツァルトと心の伴侶ゲンツンガマー夫人の訃報に接し描いた「アンダンテと変奏曲」に引き継がれています。絶頂期のハプスブルグ王朝の優雅で貴族的な宮廷サロンへの趣をたなえながら、当時のチェンバロ時代には用いられることが少なかった変イ長調を主調に定め、第2楽章においては変ニ長調を使用するなど、遙か半世紀以上後のロマン派音楽を先取りするかのような調性とロマンティックな情感が、やがて訪れる「欧州宮廷文化の黄昏」を、預言しているかのようです。

この曲が作曲された時代、ハイドンは専らピアノではなくチェンバロのために作曲しています。当時ハイドンは、英国ブロードウッド社製の優れたチェンバロを有しており、未だ発展の途上にあったピアノではなく、既に楽器として完成されたチェンバロを採用していました。しかし、77年のJ.A.シュタインのウーン式アクションの完成や、80年頃のJ.ブロードウッドによるイギリス式アクションの開発を契機に、ハイドンの創作の関心は、次第にピアノへ移り始めます。やがて、フレームも強化され弦の張力も増したイギリス式アクションに惚れ込み、1780年に楽譜へ「チェンバロ、あるいはフォルテピアノのために」と書かれた Hob.XVI-35 - 39 の一連のソナタが出版されます。それ以降、ハイドンはフォルテピアノの性能が十分に活かされるような、堂々としたピアノソナタを、後世に残します。

第1楽章 Allegro moderato 変イ長調 4/4拍子 ソナタ形式

裝飾音で始まるメロディは、左手の温かい3度と5度の同音連打による支えに乗り、明かに3小節歌われます。空気の中に溶け込むようにメロディが滑る。下降音階によってメロディの続きが奏され、ハ短調での主題の確保から、右手の3度で左手のファンパニのようなスケッチが音階に呼応し、第1主題は終わります。フルマータを経て編曲の変ニ長調に移ると、規則的に一拍毎に和音を変化させる和音動機とは対照的に、音階が即興的に流れます。トリルによるフルマータの後は、ハ短調を経て変イ長調へ移ると、奇妙な転調が、不意に心を捉えます。第1主題の動機も変えながら軽やかに提示部を終ると、第1主題が変ニ長調で再現され展開部へ、その半せり家の間、ハ短調に暗闇へ引き込まれると、暗い情熱を伴った長いオクターブ風パッセージへと迷い込みます。第1主題結尾で用いられたティンパニリズム動機が、この場においては心を切迫するかのよう執拗なオスティナートのリズム動機に風変わりします。そして今回もまた、フルマータによって流れが途切れると、第1主題の変形がハ短調によって哀しく歌われ、手前を許さない緊張感あるパッセージが続きます。主調による再現部へは、ハ短調 → 変ニ長調 → 変ハ短調 → そして変イ長調と、ハイドンの類稀なる調性感覚の天才によって見事に処理され、提示部と構成がほぼ一致する再現部が奏され、軽やかに曲は閉じられます。

第2楽章 Adagio 変ニ長調 3/4拍子 ソナタ形式

ハイドンの慈愛に満ちた甘い情緒に加え、既想的な曲想は、ハイドンが作曲した全作品の中でも屈指の緩徐楽章です。冒頭から天上界への誇りの調べが奏でられ、第1主題のメロディは、あまた天使が優しくいかけられるかのようです。第2主題は変イ長調によって、左手の和声による温かな眼差しに乗せて、右手がトリルと下降音階を用いて雲の上で天使が優雅に踊るかのようで、温かく朗らかなハバ・ハイドンの広い心にも包まれます。フルマータによって流れが一度切られると、右手の3度による下降音階に呼応するオクターブの左手によって結尾が奏されます。それはまるで威厳を有した万物の父のようでもあり、一度たとも安心感に満ちた流れが根なれることなく、第1主題が架け橋となり展開部へと入ります。展開部では、変ニ長調とハ短調による理想部分へと進みます。シュベールに始まるロマン派に匹敵する哀しいロマンスリズムと深い精神世界が、静かに時を支えます。徐々に理想心に晴れると、長調も顔を出し、フルマータを経て第1主題を省いた再現部へと入ります。再現部は主調である変ニ長調によって奏でられ、拡大された結尾によって、哀しみと慈愛とが意外性の中、交互に表出され、やがてこの偉大な第2楽章は、静かに主調の変ニ長調で終わるかのようです。

第3楽章 Presto 変イ長調 2/4拍子 ソナタ形式

フィナーレに相応しいプレストで、16分音符が絶え間なく繰り返ります。ハイドンの明るさのものが表現された、無窮動と呼ぶに値する快活な楽章です。下降音階によって始まる第1主題は変ニ長調で、16分音符で動き回る右手の中で存在感を示す8分音符の左手の第2主題として、提示部と再現部は形造られています。展開部は、第1楽章の展開部のハッサーパッセージを想起させるような、息が詰まるようなエキサイティングな響きをもちますが、再現部に入ることによって落ち着いた取り戻され、しかし勢いは最後まで衰えず、16分音符の躍動感を失わずに、軽やかかつ貴族的上品さに包まれて、全曲は閉じられます。

フレデリク・フランツ・シムク・ショパン (1810 ポーランドワルシャワ近郊 ~ 1849 パリ)

12のエチュード 作品25

前作の「12のエチュード 作品10」において、「練習曲」という訳語では表現しきれない深(高い)世界への昇華に成功したショパンですが、4年後の1837年に書かれたこの「作品25」は、更なる次元へと到達したショパン最高傑作の一つです。「高度な練習曲、即ちそれは高度な音楽性を同時に有するべきもの」との信念のもと、軽やかさと深淵な世界、その両者の極致を内包しながら、12曲は一つのサイクルとした小宇宙を形成しています。

多くの一流の芸術家や文学家、貴族とパリで交流し、既にショパンの名声は、ヨーロッパ各地に響き渡っていました。ヨーロッパ各地から、多くの生徒を迎え入れ、充実した生活を送る名士の仲間入りも果たしていました。まさに前途洋々たる芸術家人生が、ショパンの眼前に広がっていました。しかし、熱烈なる愛国主義者であったショパンの心を、悲痛なまでに引き裂いた母国ポーランドの首都ワルシャワでの、帝政ロシアに対する「11月蜂起」の失敗、祖国の危機を憂い哀しみ、ロシア軍による蜂起鎮圧を許した神に対してする、激しい怒りを抱きます。

一方、1835年に5年ぶりに再会し、魅力的な知性に溢れる芸術の才にも思われた、ポーランド人貴族ヴォジツカ伯爵令嬢マリアとの出会いと別れも、ショパンの心を深く傷つきました。マリアに魅了されたショパンは求婚し、彼女もそれを受け入れます。しかし、彼女が16歳と若く、当時のショパンの健康面が非常に優れなかったため、身分違いの恋は成就することなく、ヴォジツカ伯爵令嬢によって婚約は破棄されます。ショパンはマリアからもらったバラの花を、そしてマリアからの手紙を1つ1つ大きな紙包みに纏めて、「我が愛しき」と記し、生涯大切に保存しました。希望一敗客と絶望一悲哀の背反し変転する二つの心が、12の曲中で交錯し、私たちの心に迫ります。

(当日のフライヤーより)

全曲は、調性の驚きから、4つの部分に分かれます。

第1部: 第1番 変イ長調、第2番 へ短調、第3番 へ長調。 第2部: 第4番 へ短調、第5番 へ短調、第6番 嬰ト短調、第7番 嬰ハ短調、第8部: 第8番 変ニ長調、第9番 変ト長調。 第4部: 第10番 へ短調、第11番 へ短調、第12番 へ短調。

第1番: Allegro sostenuto 変イ長調 4/4拍子 水平線から、万物への恵みである太陽がゆっゆと昇るかのよう。第1曲目では驚きが始まります。両手のアルペジオによって演奏され、どこまでも平穏で、温かい世界が広がります。「エオリアンハーブ」の名称で知られていますが、とうやらかシモン本人ではなく、庇護者であったシモンによる命名のようです。「エオリアンハーブ」とは、ギリシャの風神アエロスに由来する。自然の風を利用して音を発生させる弦楽器です。

第2番: Presto へ短調 2/2拍子 マリアとの婚約が破棄された後、パリに戻ることでこの曲を作曲し、「私の魂の肖像」と名付けました。まるで、行き場を失った魂が、出口の見えない螺旋階段を彷徨い続けるかのようです。

第3番: Allegro へ長調 3/4拍子 雰囲気は一変し、軽やかに、そして活力に溢れる練習曲です。子供が、無邪気に駆け回るような印象を与えながら、ショパンの転調と和声の細部に天才が宿る佳曲です。

第4番: Agitato へ短調 2/2拍子 左手が跳躍し、右手は常に裏拍から後を追いつき、何かから急ぎ立てられるかのようです。曲前半部分の一貫した特徴である軽やかさを、Agitato でありながら表現しています。

第5番: Vivace - Più lento - Tempo 1 へ短調 3/4拍子 「スケルツォ風」と指示された主部と、曲集中で屈指の美しさを誇る中間部から構成されます。中間部は長調へ移り、左手の旋律に右手の上下行を繰り返す伴奏形式が現れ、優雅な流れを添えます。ホ短調の主部へと戻りますが、最後は長調に移り、崇高な美しさを讃えながら、音は天へ昇ります。

第6番: Allegro 嬰ト短調 2/2拍子 メランコリックな哀愁が響く左手の旋律に乗って、右手が3度の重音を様々な形を用いて演奏されます。最後は、次の曲と同じ表情記号である Lento へ移り、閉じられます。

第7番: Lento 嬰ハ短調 3/4拍子 この練習曲集が傑作である所以は、この曲に在ると形容しても過言ではありません。ショパンのあんな哀しみという哀しみがあり、この曲に込められているのです。祖国ポーランドを熱烈に愛しながら、病弱であるが故に、ロシアの隣に騎士として身を投じることが許されないうと、かきと深い哀しみ、名状しがたいこの哀しみは、ショパンの心を引き裂きます。右手と左手のそれぞれの旋律が、痛々しいまでの哀歌を奏でます。

第8番: Vivace 変ニ長調 2/2拍子 前曲とは打って変わり、再び軽やかな世界へと舞い戻ります。両手で6度の重音を演奏する。練習曲の名に相応しい曲です。

第9番: Allegro assai 変ト長調 2/4拍子 まるで蝶が舞うかの如く、或いは、第3番と同じように、無邪気な子供が駆け回るかのよう。平穏な世界がそこにはあります。しかし哀愁は、遠ざかりながら、最後は滑るようにならなくなります。

第10番: Allegro con fuoco - Lento - Tempo 1 へ短調 2/2拍子 次曲とともに終曲に向けて、曲は深く、重く、恐ろしい世界へと歩みを進めていきます。ショパンはついに、哀しみによって支配された自身の心のパンドラの箱を開けてしまったかのようであり、激情がほとばしります。オクターブのユニゾンによって、不気味に曲は始まるが、程なくして曲を激憤が支配します。中間部のロ長調では、雲間から天上の陽の光が注ぎこみ、希望を予感させるような美しさに溢れますが、やがてしかし、それは石となって消え、曲はあらん限りの力で容赦なく希望を破壊して、荒れ狂い続けるのです。

第11番: Lento - Allegro con brio へ短調 2/2拍子 何処からともなく聞える単旋律で曲は始まり、長調のコラールへと驚かされます。最後の音でへ短調が確定し、全てをなげくような木枯らしが吹き荒びます。コラールのような左手の祈りも虚しく、意欲のような木枯らしは全てを吹き飛ばす確信は、行場のないショパンの激しい怒りを代弁しているかのようです。

第12番: Allegro molto con fuoco へ短調 2/2拍子 「大洋」の名で知られる。両手のアルペジオによる美しい曲です。まるで大海原を嵐が蹂躞するかのような激憤に駆り立てられた曲ですが、最後にはハ長調に転じて、堂々とした大団円を迎えます。「高い壁が眼前にそびえようとも、登らなければいけない、とれほどと高い壁を負って、立ち上がらなければいけない」。魂が潮の漲を傍聴したショパンは、遂にこの曲を通して、「人間の哀しみとは、かくあるべき」という華やかな力強(高らかに打ち出した)です。

ここで、15分間の休憩を頂きます。

ヨハネス・ブラームス(1833 ハンブルク - 1897 魏瑪)
3つの間奏曲 作品117

1892年の夏から翌年にかけて、この曲集を始めとする、ピアノのための最後の「4つの曲集」が作曲されます。その頃、ブラームスの身辺では、身内や友人に不幸が相次いでいます。ブラームスの精神状態は芳しくなく、これらの曲集に對して、自ら「私の苦悩の守り歌」と呼んでいました。この「間奏曲集」も、往年のエネルギーに満ち溢れた曲調とは大きく異なり、当時の精神を投影して、陰影の影が深い作品です。肉省的であり孤独であって、全曲の底流をなす見事なまでの対位法によって描き出された「諷刺的な心象」は、もはや神秘的でさえあります。

簡素な形式により、人の深い心情を音たちに凝縮させた円熟の書法は、ブラームスが到達した「人の深淵なる境地」であり、この傑作は、ブラームスの偉業を後世に伝承し続けているのです。

第1曲:Andante moderato 変ホ長調

「安らかに眠れ、我が子、美しく眠れよ。泣くあなたを見るのに、私の心は堪らないから」と、冒頭にスコットランドの子守歌が添えられています。メロディは、天上界のような美しさをたたえています。一転、同主調の変ホ長調で奏でられる中間部は、まるで第2曲、第3曲の孤独と絶望を予兆するような「静かなる哀しみの園」です。曲は再度、変ホ長調に戻り、眠りに就くかのように曲は終わります。

第2曲:Andante non troppo e con molta espressione 変ロ短調

8分の3拍子のまことに小さなソナタですが、第1曲に比べ、やや流動的に曲は進められます。極めて高度な対位法が、曲の核を成しています。右手と左手が呼応するようなアルペジオには、晩秋の夕暮れに結実が舞い落ちるかのような、他しさが込められます。

第3曲:Andante con moto 嬰ハ短調

低音部のユニゾンによって、主音から曲が始まります。一個人としての孤独と絶望を超えて、人間としてそれらを全て受け入れ、やがて諦観する後姿は、当時のブラームスの心情そのものと思われず、中間部では曲は動き、感情が揺れ動きが、やがて主部に戻ると、この偉大な全曲は、薄らぐて空になるかのように、聖籐の花祭へと、昇華されていきます。

ロベルト・アレクサンダー・シューマン(1810年 ドイツクセン - 1856年 ボン演劇)

幻想曲ハ長調 作品17

「鳴り響くあらゆる音を貫いて 色彩豊かな大地の夢の中に ひとつの微かな調べが聴こえる 密やかに耳を傾ける人のために」F.シュレーゲル(1772-1829)

後世に数多くの財産を残し、きら星の如き作曲家たちが群生した浪漫派の時代、それぞれの作曲家に流儀があり、多くの様式も派生していききました。この時代の音楽における主要な命題は「音と言葉の結び付き」にありました。元より、世界の事象を音楽を通して表現する標題音楽は、ルネサンス時代から存在していました。しかし絶対音楽に主眼が置かれ、殊に音楽そのものの自身に有する魅力を極限まで高めた、バロックや古典派の「偉大な時代」から時は昏黄れつつ流れ、特にシューベルト以降の時代の音楽による表現方法は、言葉からの着想を経て音へと還元する様式が、多く見受けられることとなりました。書籍販売と出版業を営んでいた父の影響から、幼少より文学に親しみ、後には音楽評論家として「新音楽時報」を創刊するに至ったシューマンこそ、音楽と言葉の結びつきを最も強く意識した作曲家です。シューマンによる「クライスレリアーナ作品16」のモデルとなった著作「クライスレリアーナ」を発表した作家であり画家の、そして音楽家であった E.T.A.ホフマンの主たる思想を解析すると、以下ようになります。「魔法のような音楽の世界を、言葉で表現すること。名状しがたい世界を、音響に表すこと。それらを通して、永遠の憧憬を表現すること」。

1835年、ボンにベートーヴェンの記念像建立の計画が立てられ、ベートーヴェンを敬愛してやまなかったシューマンは、リストと共に発起人に名を連ねます。記念像の除幕式は10年の歳月を要しますが、建立に向けて寄付金を募るため、リストは演奏旅行を行い、シューマンもこの曲を38年に掛けて作曲し、リストに献呈されました。シューマンは、この「幻想曲」にベートーヴェンが

かつて用いた動機を幾つか使用していますが、その最たる例が、ベートーヴェンの歌曲「通かなる恋人 作品98」から引用された動機です。第1楽章コードの最も感動的な場面での動機は使用されますが、「通かなる恋人に寄す」から引用した理由は、ベートーヴェンへの尊敬心のみではありません。当時のシューマンの私生活にも、目を向ける必要があるのです。

幻想曲を作曲した39年のシューマンは、クララ・ワグナーと婚約していました。しかし、クララの父フリードリヒの意思に反したものであったために、成就させることが厳しい状態に追い込まれます。父の監視下の元、シューマンとクララの逢瀬は「叫び、秘密裡に文通を交わしていました。最愛の女性と会うことすら許されないシューマンは、痛切なる哀しみと一切を、この幻想曲に注ぎます。

過去の偉大な象徴であるベートーヴェン、現在の痛々しいまでの心境、そして未来へと託された光輝く輝く希望。3つの異なる時間軸が重なり、シューマンの詩的な感情が最も表現されたこの作品こそ、現代に生きる私たちが触れることを許される、浪漫派時代の大いなる金字塔であります。

曲は当初、「フロレンス」とオイゼビウスによる大ソナタ ベートーヴェンの記念のためのオーボエーン(寄付金の意)作品12」と題され、各楽章に標題が付いていましたが、出版の際には「幻想曲」に改名されました。各楽章の標題も取り除かれた代わりに(本解説では採用)、音と言葉の結びつきに注力したシューマンは、冒頭にシュレーゲルによる詩を掲げました。

第1楽章:「廃墟」。ハ長調 ソナタ形式 4/4拍子

“あくまで幻想的に、そして情熱的に - 昔語りの音調で - 最初のテンポで”

“Durchaus phantastisch und leidenschaftlich vorzutragen - Im Legendentone - Erstes Tempo”

楽章を通して、2つの主要主題が多様な姿を変え、現れは消え、交わっては違いますが、「幻想曲」たる所以を示すが如く、筆舌に尽しがたいほどの多様性が私たちに包み込みます。長い物語が始まることを予期させるかのような長調の第5音から始まる左手による「鳴り響くあらゆる音」を、主旋律が貫いて、主題が堂々と提示されます。この主題は、クララが作曲した「ワグネル形式によるカプリス 作品2」の5つ目の下降音階による旋律から引用されました。「ひとつの微かな調べが聴こえる」。この微かな調べとは、クララのことを指し、この「クララの主題」とも言うべき第1主題は、以降、変形を變え、様々な仮面を被り、曲中に登場します。

「情熱的なフロレンス」。「夢想的なオイゼビウス」の両者の性格によって第1主題が提示されると、第2主題ではシンコーペーションによる右手も、重い足取りを想起させるかのような左手が、お互いに拮抗するかのようになり、ハ長調の主題が現れます。輝かしい未来を信じてながらも、現実の障壁は行く手を阻みます。第1主題の断片が、時に真意を帯びながら、時に夢見心地に奏でられ、時に活発にも、謙和にもそれぞれの仮面を着けて素顔を隠すかのようになり、様々な仮面を被り、曲中に登場します。

展開部に入っても、提示部と同じように「2つの主題」が多様な形で現れます。第2主題を主要主題とした「昔語りの音調で」と指示された場面では、今は過去となった栄光を後し語る吟遊詩人が、廃墟の前に佇むかのような雰囲気は覆われ、当時のシューマンの心境が投影されているかのようです。

再現部を経て奏でられるコードでは、「通かなる恋人に寄す」から引用された動機が用いられます。ベートーヴェンは、以下のような歌詞にこの動機を用いています。「これらの歌は 私たちを隔ているものを消し去る そして愛する心は届く 愛する心が崇めたものに!」。曲はやがて、通か彼方への憧憬と共に、静かに閉じられます。

第2楽章:「凱旋門」「勝杯」。変ロ長調 自由なロンド形式 4/4拍子

“歩みを進めるように。とても精力的に - ややゆっくりと - 極めて活発に”

“Mäßig, Durchaus energisch - Etwas langsamer - Viel bewegter”

栄光を勝ち取らんと、未来へ向けた輝かしい足取りを進めるシューマン自身を表したような行進曲風の主題から、曲は華々しく始まります。告げます。この主題は、以降2回登場し、その度により豊か響きで奏されるように指示されており、楽章全体が、コードの技巧的な跳躍パッセージに向けて大きな発展を意図していることが、見て取れます。この主題でもまた、第1楽章の第1主題と同じように、クララの旋律が用いられます。第2主題では、ベートーヴェンの「ピアノソナタ第28番」の第2主題と同じリズムパターンからの引用が認められます。精力が湧く大きなエネルギーをもつ行進曲の第1主題と、内面に緊張感を保ち続けるリズムパターンの第2主題は「フロレンス」の要素で進んでいきますが、中間部は一概して「オイゼビウス」が現れ、穏やかな情緒を醸成します。再びロンド主題に戻ると、曲は勢いを増しながらコードへと入り、曲は勢いを失うことなく率やかに閉じられます。シューマンが、未来へ向けた力強い決意を宣言せんとする、堂々たる楽章です。

第3楽章:「星の冠」「棕櫚の枝」。ハ長調 自由なソナタ形式 8/12拍子

“ゆっくりと。静寂の中で”

“Langsam getragen. Durchweg leise zu halten”

棕櫚の枝には、2つの意味があります。戦争に勝利した軍隊が、凱行行進の際に持ち歩くことから、キリスト教では、「死に立ち向かう信仰の勝利」と読み換へ、尊い殉教者を意味する持ち物として取り入れられました。一方、棕櫚の葉が落ちた場所から、新しい芽が吹くことからも、「復活や不死の象徴」としても解釈されました。

この楽章は、「密やかに耳を傾ける人」に掛けられた純愛の告白とも言うべき、極めて美しく、特別な楽章です。第1楽章と第2楽章

では、表立って提示されていたクララの旋律が、この楽章では左手へ移り、深く深く包み込むように奏されます。第2主題は、幾分動きを伴いながら、数多くの転調を経て進んでいます。展開部を省いた再現部でも、提示部と同じく様々な転調を歩いて、主調であるハ長調の安堵には中々辿り着くことが出来ません。「色彩豊かな大地の夢の中」に彷徨いながら、ようやく、安らげる地であるハ長調に落ち着く「後」に動きを伴い、テンポを速くして」との指示があるコードへと入ります。蠟燭の灯が最後の煌めきを見せると、曲は揺らぎに静寂の中で閉じられます。長い旅路から帰ってきたシューマンの魂は、クララへの愛に拘り、永遠不死の憧憬を心に抱き、一節の塵となって空へと昇り、薄らぐて消えていくのです。

本楽曲解説中に、誤りや研究不足の点がございましたら、ご指導下さいませようお願い申し上げます。
piano.ryoma@gmail.com 高木 竜馬

(当日のフライヤーより)